兼好法師あとおひ 碁盤太平記

兼好法師あとおひ 碁盤太平記

付り師直がさよ衣今は一襲の黒羽織 并に大勝四十七目の石 （八行三十三丁本）

近松門左衛門作

地物まうどなたぞ頼みましよ。地頼みませう物まう〳〵と引聲も。長路地の裏座敷フシ浪人住居奥深し。地折ふし嫡子の力彌は碁盤引寄せ片手差し。三つ目が〻りの大指拍ぎ腕先試して居たりしが。詞そこに岡平は居らぬか。物まうが有る請取れ。地岡平々々と呼びればどれいと應へ出でにける。詞是は承り及ぶ鹽冶殿浪人。初の名は八幡六郎。今は大星由良之介殿と申す御方の御宿はこれか。中々由良之介借宅なりといひければ。愚僧は關東の所化。用事あつて昨日京着致せしが。鎌倉の町大驚文五と申す。地是も鹽冶殿浪人より御狀一通ことづかり。急用なり大事の用慥に屆けくれとのこと。お屆け申すと出しける。且那は他行致され悴力彌宿にあり。申し聞かせんと入らんとす。詞ア、是々。愚僧も本寺へ用あるもの。地お目にかゝるに及ばずとフシいひ置いてこそ出でにけれ。地岡平力彌に書狀を渡し口上述べんとする所に。又物まうと案内すどれいと應へ出でければ。地是さ主達。物さ問ひ申すべい。我たうは常陸からつん出た順禮さでおんじやり申す。鎌倉切通の邊で狀をことづかり申した。大星由良之介殿といふは此の屋臺に寢まり召さるか。いかにも是が由良之介旅宿。シテ何方よりの御狀といへば。是さお見やれ狀は十四五もおじやり申す。渡した人は小寺總内竹森喜多八。片山源太といへば先に合點だ。頼むと有つてことづかり申した。順禮が屆けたと返事にゆつてやりなされと。地いうて出づれば。詞これ且那殿。大星由良之介樣は是か。こちは相州の馬方。三條堀川迄早追の通に來ました。鎌倉の町原鄕右衞門といふ人から。地狀ことづかつて草臥ながらほつこしうもないとフシ持つて來る。地あと笈負うたる高野聖。詞我等此度東へ下り鎌倉の星月夜。堀井彌五郎殿と申す御方よ

り。地急用の御狀とてことづかりしと置いて行く。お祓配の伊勢の御師六十六部の納經者。關東廻しの商ひ便宜思ひ〳〵の便について。案内合圖の忍の狀數四十餘通。九月五日の一時にフシ到來するこそ不思議なれ。地岡平一つにひん抱へ力彌の前に手をついて。詞一度一度に申し上げんと存ぜしまに。追々に屆き申す故數多ければお名も忘れ。元より無筆の私讀むことは盲なり　地狀は紛れ申せども屆けられし口々は。忘れませぬと申しける力彌打笑ひ。詞世には無筆も多けれども。おのれが歳まで方々して。一文字引く事も讀む事もならぬとは。地子供に劣つた奉公人親父のお歸りなされたら。屆けた樂を覺えて申せ。ヤア序におのれにいふ事あり。昨日お登りなされし女中一人は身が母ぢや人。お年寄つたは祖母樣。隣の家主の座敷を借り一兩日は御逗留。地裏はひとつの行通ひ浪人でも武家は武家。常の樣に自墮落に裏越に行くまいぞ。御見舞申して來るまでに用があらば切戸を敲けと。文ども簞笥に錠卸し。裏へ出づれば表より頼みませうといふ聲す。力彌聞付け何事かと障子の陰より窺ふとも。思ひがけなく岡平は。はて再々の頼みましよ。どれからざふと立ち出づる。詞いや我等は鎌倉の三度飛脚。大星由良之介樣の内衆岡平どのとはこなたか。高師直樣のお屋敷からと。地狀取出せばしいしい高い〳〵。成程合點請取つたと懐中に押入るゝ。詞いや是々當代の師直樣大事の御用と御念が入つた。何時に屆いたと委しい請取欲しうござるといひければ。ア、聲高な合點ぢや。地請取せんと駈入るも人は見ずとや硯水。灘本流の墨色やなまなか常に無筆ぞと。僞る筆の毛を吹いてフシ疵を求むる類かな。地飛脚は手形請取つて立歸れば岡平は。封じ目切つて小隅へより繰返し讀む長文の。しかも細字をつら〳〵と南明の横槌子。影唇を動かせば無筆といひし空言も。顯れ渡る網代木やうぢ〳〵として隱しかね。ずん〳〵に引裂き茶釜の下に打燻べて。門脊戸口に目を配る體力彌とつくと見すまして。大きに呆れ是れは扨。色事などの文ならば隱す術もあるべきが。いろはも知らぬと無筆になつて人の心をゆるさせしは。底意にたくみ有る奴殊に飛脚が詞のはづれ鎌倉よりと請取を書かせて取つたる次第迄。思へば敵の入れたる犬彼奴内通に極つたり。エ、出

拔かれし口惜しさよと胸をさすつて立つたりしが。我々が發足も今日明日に近づいて。駈落するか道中にて外すか。何にもせよおめ〳〵と取逃しては無念なり。一刻も油斷はならず。手討にせんと思案を極め。然あらぬ顏にてやいやい岡平。火の廻り氣をつけよ。紙衣臭いと出でければ。詞いや少しも苦しからぬ事。八幡愛宕方々のお洗米の包紙。地只今火に上げ申したりと。間に合ひ嘘も眞赤いなフシ火箸嬲りてゐたりけり。詞ムヽさこそさこそ。ヤ最前物まうは何方からぞ又文などは來ぬかといへば。いや〳〵それは私用。近日お下り近づく故道中の嗜。晒木綿の切を買ひ代物が遲いとて。氣の小さい商人め毎日せがみにうせをる。地旦那に勤める岡平三匁足らずに銀やらずに立つと思ふかと。木綿は六尺一寸のがれフシ實し。やかにぞ僞りける。地力彌始終を聞屆け曲者に疑なし。下人手討は大事のものと豫て親の物語。一生の手始め仕損ずまじとこりや岡平。用がある此處へ來いとにこやかにいひければ。ないと答へてゐざりよる。詞いやずんど此處へ寄れ。遠慮なしに膝元へ　地つゝと來いといふ五音。岡平も心付き脇差ぬいてからりと捨て。丸腰になつて出でんとすヤア其の儘脇差さいて居れ。さいて來いと重ねていへば如何樣とも兎角御意は背かじと。脇差さいて腰屈め左勝手に坐したりけり。力彌も小膝を立直し。ヤレ己れは最前關東の飛札を讀み。請取迄を書きながら一文不通の無筆と僞り。主人の眼を晦し誑したる不屆によつて。地成敗するぞと聲をかけ拔討にはたと切る。左の肩先肋をかけ脇差まで切りつけられ。のつけに返すを取つてひつ敷きとゞめを刺さんとせし所へ。父由良之介立歸り門口より聲をかけ。詞ヤレそいつにとゞめを刺すな。地仔細ありと走入り力彌が脇差取らんとすればこいつは敵の內通者お退きなされと引放す。詞ヤレそれをお主は今知つたか。彼奴がつくり無筆になり。敵方の內通とはそも〳〵より此の由良之介が見付けしが。地只今討つては敵方に。すは顯れしと用心の氣をつけさせ。敵に六分の德あつて味方には六分の損あり。內通と知るからはその儘彼奴を生けて置き。謀を打返に白き物を黑く見せ。赤き物を靑く見せ虛を實に振舞へば。彼奴はそれを實とし其の通を內通せん。時には敵に裏くはせ居ながら敵の

懷を。知るは味方に十分の勝十分の德とつて。詞仕舞には此奴を殺しても助けても。損も益もない事。損益なくば同じくは助くるは慈悲仁の道。我が計略は智より出でお主が手討は勇の道。是常にいふ智仁勇。弓馬の家の守にも本尊にも此の三つ。地是を守るを忠臣とも忠義の武士とも名づくるぞ。エヽはやまつたり粗忽なり。さりながら若き者道理かな。道理かな我も口にはかくいへど主君を無罪に殺害させ。其の仇をも報じ得ず主の敵と今日迄も。同じ天を戴くは智仁勇も口ばかり。忠臣の道を失はん。口惜しさよと兩眼に無念涙を浮ぶれば。地力彌も教訓聞くにつけ。父が涙に催されフシ落涙とゞめ兼ねにけり。地深手の岡平起直り親子の顏をつく〴〵見て。涙をはら〳〵と流し。詞眞實敵の內通と思召されん恥かしや。疾くに名乘らん〳〵とは存ぜしかど。一日も師直が扶持を受くれば。主從の道にあらずと延引し。地此の仕儀に罷り成る拙者が親は前殿樣。御持弓の足輕寺岡平藏と申せし者。某は寺岡平右衞門。先年我等九歲の時。御領內の鹽燒濱。檢地の落度に親平藏御扶持を放され。地流浪の身とは成りながら奉公こそは足輕なれ。忠義の道にフシ違ひはなし。二君には仕へまじ譜代の御主に今一度と。十餘年の渴命は草の根をはみ木の實を拾ひ。水を飲んで暮せしに。詞去年殿樣滅亡と聞くより親子が此の時に。追手の御門を枕にして。鹽冶殿の足輕寺岡親子が忠心と。地鎗下に名を止め御恩を送り奉らんと。御城下へ馳せ參じ籠城願ひ歎さしかど。浪人を集めては謀叛の籠城同然にて。天下の咎め憚あり叶ふまじきと追ひ返され。詞親平藏は七十の老の望も是迄なり。冥途へ參つて殿樣へ御奉公仕らん。地手ぶりのお目見えいひがひなし己れは敵師直が。首取つてお土產に後より參れと申し置き。去年の當月切腹致す親の遺言お主の仇。人手にかけじと存じ立ち緣を求め心を碎き。詞師直が旣奉公に罷り出で。馬の口取る時もがな只一討と佛神に。祈つて時節を窺へども用心深く引籠り。馬はさておき乘物でも他行とて致さねば。地本望遂げん時節もなく。我が身の運の拙さと。思ひながらも世を恨み天をかこちて一冬は。布子の袖の乾く間もながき夜すがら忍びなき。よし仕損ぜばそれ迄よ切込まんと存ぜし內。各方の檢見のため方々へ犬入るゝ。

我等其も役申し付け見る事聞く事内通し。虚言他言あるまじと熊野の牛王に血判据ゑ。方々へ出でけるが只目にかくるは此の御親子。案内人に知らせじと當春より御奉公。親が念願殿様の草葉の蔭の御忠節。せめてもと存ずる故内通の度毎に。詞由良之介親子の者腰が拔けて武道を忘れ。遊女に耽り酒宴に長じ。武具も馬具も賣拂ひ。主の敵を討つことは思ひも寄らず。一門も仲違といひ遣はすを實にして。地師直が用心怠り連歌茶の湯花の會。油斷とは此の時なり片時も早く御下り。本望を遂げられよ。詞サア此の事申し仕舞うては浮世に思ひ置く事なし。はや〳〵止を刺いてたべ。熊野の牛王の起請の罰。現世にはあり〳〵とお手討にあふ現罰。地未來の無間も疑なし那由陀劫が其の間。阿鼻の苦患は受くるとも一言なりとも主君の忠。親の願を達する事喜ばしや嬉しやな。さりながら願はくは今少し存らへ。敵討の御供し敵の首を一目見て。一所に腹を切るならば。なんぼう嬉しかるべきぞ忠義は人に負けねども。實の時に外るゝは是も起請の罰かとて。口説歎くも息切れてフシ哀。涙の玉の緒の脉も。亂れて見えにけり。親子も不覺の涙にくれ驚き入つたる忠心。今一言の知らせにて大勢本意を遂ぐる事。一騎當千ともいひつべし身柄こそ足輕なれ。お主は冥途の鹽冶殿我等親子も傍輩なり。主君の忠義に傍輩の禮をいふも慮外なり。詞由良之介が志に此の度の一味の武士。我々親子を始として。以上四十五人あり。たとへ其の場へ出てずとも其の方親子を差加へ。四十七人忠義の武士と末代に名を止むべし。地これを冥途の感狀と親父に語り吹聽あれ。あつたら武士を殘念やと涙ぐめば嬉しげに。顏差上げて一禮をいはんとすれど舌すくみ。聲も出でねば手を合せ。頭を下げて頷きし。フシ心の中こそ哀なれ。地力彌は手負の顏色見てはや眼の色も變つたり。息のある中師直が。屋形の案内聞き置きたしといひければ。げに是は氣がついたり大略如何にと尋ぬれども。心許に息切の只ウ〳〵と苦みて言說更に分らねば。詞由良之助碁盤を寄せ。これ此方より碁石を並べ圖を造つて尋ぬべし。合はゞ頷き合はぬ時は頭を振り。指をもつて引直せ。白石は塀黑は館と心得よ。地此處は東表門一目を十間積。並べし石數十四目。百四十間これ皆塀か。ム〳〵折

廻しに平長屋西の裏手は長屋か塀か。扨は是も折廻しの長屋門。櫓は爰に辰巳角玄關は此處の程。侍小屋は南か北かム、〳〵三方に取廻し。馬屋は西か武具の藏。扨はこゝらぞ遠侍廣間は是より是までな。奥の寢所は此處か彼處かム、出來た。然れば此の間長廊下。此の間が泉水築山廣庭ならん。北は明地か碁盤の目。明いても塞ぐ手負の目。うんとばかりを最後にて フシ終にはかなくなりにけり。地ヤレ音たてな沙汰するな町屋住居の氣の毒さ。家主へ聞えては今日か明日かの發足に。大事の前の障りなり。隣座敷へ聞えても。母女房につゝむ事跡は兎も有れ當分遁れ。是又旅宿の重寶と親子領き疊を上げ。根太こぢ放し死骸打込み。やう〳〵に元の如くに取繕ひ。疊に溢れし血を押拭ひ物陰に敷換へ〳〵。能いわとはいひつ此の上にも。慣むは兩隣外より人も來る事あり。色恠られなと囁きて。親子碁盤に差向ひサアいくつで五つでか。詞それでもなるまいま一つ置いて。六つの鐘 ウタヒ山寺の春の夕を來て見れば。入相の鐘 地荻の聲庭の切戸を フシ押明けて。地由良之介の奥方つかつかと立出で。申し〳〵。謠の聲碁石の音隣座敷へ響きまする。私は夫婦の中おいとしやおふくろ樣。遥々お供申せしもそもじ樣の腰が拔け。地お主の敵は打忘れ盤上亂舞の遊び事。弓矢の道はすたりしと一門中の腹立。此の異見のためばかり國許の老母女房が。昨夜登つた今朝早々内を出て今歸り。親子碁盤で阿呆げな山寺所ぢやあるまい事。詞過分の所領を賜り。鹽冶判官高貞の執權と敬はれ。三千騎五千騎の諸侍の上に立ち。國中を靡けしは殿樣の御恩ならざるや。地其の敵を生けて置き御命日の精進も。御回向も寺參りも何しに佛が受け給はん。御恩は何で報ぜんとや。詞ヤイ力彌め悴め。父こそ腰が拔けうずれ母が腹を貸したぞよ。なぜ父御前に意見はせぬ。家に爭ふ子なければ家治まらずといふ事を。常にいうたが忘れたか。地己れが二歳の秋の末有難や殿樣の。お膝の上に抱き上げられ。親に劣らぬ人相あり成人して忠功なせと。力彌とは殿樣のお着せなされし烏帽子ぞや。其の時に勿體なや幼い者の習とて。殿のお膝を濡せしを却つて殿には御機嫌よく。でかした〳〵主の膝を憚らぬ。その心では百萬騎の敵を敵とも思ふまいと。御感の言葉を常々にいひ聞かせたを

忘れはせまい。人でなしの父親は忘れても此の母は。寢ても起きても主君の御恩束の間も忘れはせぬ。庭に飼ひ飼ふ犬迄も主の仇には噛付くぞや。差いた刀は化粧か伊達か左程敵が怖いか。何時迄命が生きたいぞ臆病者卑怯者。何の因果に腰拔を。子に持つたぞと聲を揚げ　フシ前後。不覺に泣き給ふ恨の程ぞ道理なる。地力彌は俯き返答せず由良之介色をかへ。　詞ヤアロ上張るな女め。主の敵をえ討たいで恥をかいても身どもが恥。酒宴遊興長生して樂みも身が樂。人を傭ふ事ではない。威勢强き師直を討ち損へば首が飛ぶ。討ち了すれば腹を切る何方へしても死なねばならぬ。地損する者は我ばかり譽められて死なんより。誹しらて生きたが得一門も緣者も。岡目八目傍からはいひよい物。力彌に向つて惡口我が子にはいはれうが。夫にはいはれまいサア。いはれうば云つて見よと聲も荒くなる所へ。老母は走り出で給ひヲ、夫には云ひ惡く我が子には。云ひよいな。詞然らば其方は妾が子。其方にいふは此の母さりながら口では云はぬ。地犬同然の畜生は礫に思ひ知らせんと。碁笥なる石を引掴み搖掴み。目鼻も分かずはらり〳〵と投付け〳〵。散々に投掛てわつと泣き出しなう奥。此方も元は他人なりあのやうな子を持ちて。其方の心が恥かしい何もいやるな云ふまいぞ。サア此方へと手を引いて涙乍らに入り給ふ。流石は武士の嫁姑例へなうこそ聞えけれ。地力彌は泣いて平伏ししが御心根もいたはしし。そと御知らせあれかしといへばいや〳〵。詞一言大事の所。其の上母や女房も一味なりといはれては。母方の一門妻の緣者天下の詮議にかゝらん時。人の心まち〳〵にて見苦しき事もある時は。地屍の上の恥辱なり百丈の木に登つて。一丈の枝より落つるとは爰の事。母の恨も妻のかこちも。本望遂ぐれば今の間に晴るゝ事。大事を思ひ立つ者が小事に拘る事勿れと。教訓あれば御尤御尤。詞ヤ忘れたり。鎌倉下向の一味の衆。四十餘人より段々飛札到來と。地簞笥を開き取出せばこれは〳〵。扨は鎌倉首尾よき便と覺えたり。それ封切れと親子の人手々に開き見給へば。敵師直油斷の時節到來せり。一時も早くお下り待ち奉り候と。大概同じ文體なりサアめでたし〳〵。武具は先へ廻し置く。旅立ちとても此の身柄明日といふも手延なり。笠も草鞋も道での事此

の文どもを火中して。金子を肌に忘るゝな。當地の拂宿代は。書付に相添へて簞笥の中に殘し置く。心にかゝる事もなし我が女房はそちが母。我も老母の顏を暇乞にたゞ一目。一寸覗いて立つべしと手燭差上げ奥座敷の。襖戸そつと明けければ床の前に人伏したり。誰なるらんとよく見れば嫁姑の吭の鏈。朱に染みて伏し給ふ力彌は是はと驚けば。由良之介押鎭めアヽ是でこそ我が女房。是こそは我が母なれ命を捨てゝ我々が。心に勇みを附けられしは尤斯うこそあるべけれ。主君の敵の師直に母の仇妻の仇。三つの恨を一太刀に晴さんと思ふ門出は。嬉しうないか嬉しうござる。足が輕いと進むにも流石恩愛骨肉の。變れる容に氣後れして父には包む力彌が涙。父は我が子を勇めの笑ひ泣くも笑ふも武士の道。哀にも亦賴もしし。地老母むつくと起きあがりアヽ嬉しや本望や。其の心が知りたさに母は自害を半にして。今の詞を待ちたるぞや。如何なる知識の勸めより。今の詞を引導にて嫁姑は成佛す。跡の死骸の取置も去る方に賴みおく。浮世に氣掛つゆ塵なし突込む脇差合圖にして。跡見返らず門出あれ彼方へ參つて殿樣へ。御披露申さばお悅びさぞお待かねなるべし。片時も早く本望遂げ親子連立ち早うおじや。詳しい事は冥途にて先づそれ迄はさらばやと。がはと突立てあつといふ聲を聞捨て振捨てゝ。行方に響く夜半の鐘。ともに孝行忠孝の武士の。道こそ　三重〕逞しきフシ爰に鎌倉。地高の武藏守師直が飯島の屋敷構。東面に石壁高く西には大河漲りて。南の方に入海の船の往返自在にして。甚だ堅固の要害なり忠功武勇の鑢冶が郎黨。此の要害に氣を屈し今は狙ふ人なしと。聞くより師直油斷を生じ。くせの驕の歡樂はフシ運の末とぞ聞えける。地文和三年空冴えて冬も半の雲凍り。霰亂るゝ夜嵐に口切の夜會を催し。數輩の客人勝手方。果は亂舞の酒宴に小夜もゝ漸々更けにけり。地やゝあつて表の門を敲き。詞藥師寺二郎左衞門公能。初雪の御茶の湯に伺候致すと呼ばはれば。門番立出で。早お振舞は相濟みお客も殘らず御歸り。奥もやう〳〵仕舞にてお夜詰も退け申す。明日お出と應へける。いや苦しからず。宵より參る筈なれども。典厩の御所に御用あつて遲參せり。師直公のお寢間にてお話し申す事もあり。今宵は是に一宿致すお心易き藥師

寺。地ゆめ〳〵氣遣なき事爰明けられよといひければ。げにいつもの藥師寺殿いざ御通り候へと。門を開けばつゝと入り。詞番の衆太儀〳〵々々。最早夜半であらうが。鹽冶判官が家老腰拔の由良之介今は町人同然になつたるとは聞きたれども。燒鳥に綜緒用心にあきはない。拍子木を絶さず代り〳〵に寢ずの番必ず油斷召さるな。ヤイ身が供の者。明日晝時分に迎に來い。地朝飯は此方で食ふおれが飯は炊するなと。玄關に入りければ廣間は雨戸締むる音。屋敷の圍拍子木の音森。々々とぞ　三重へ更け渡る。地夫柔よく剛を制し弱よく强を制するとは。張良に石公が傳へし祕法なり。鹽冶判官高貞の家臣大星由良之介。これを守つて既に一味の勇士四十餘騎。露命を亡君に抛ち死を一戰に極めて。獵船に取乘つて苫深々と身を隱し。稻村崎を漕出し天に滿ちたる曉の。霜も鋭き白波の　ヲシ岸の岩根に漕寄せたり。嫡子大星力彌苦押退けて舳板の上につと出て。忍び提灯差上げ敵の要害遙に見て。時こそよけれあれ御覽ぜ。人鎭つて淸氣は沈み空に朝霧横をれて。濁氣上を覆へり拍子木の調子金にして。數は九つ老陽金尅木火尅金。自滅の相現れたり破軍は辰巳に向うたり。地東の門より南へついて乘れや〳〵と下知すれば。心得たりと片山源太槍提げてぞ出てにける。竹森喜多八長刀奥山孫七須田五郎。勝田早見東の森七筋合せの鎖にて。板金繋の着込を着し割筏割瓢。家金襴の塗籠手を揃へてこそはさしもげに晉に。聞えし原鄕右衞門。大鷲文五掛矢の大槌。提げ〳〵下り立てば吉田岡島不破前原。各薙槍　地横たへて　ヲシ列を揃へて打つたりけり。地小寺藤内立川甚平。千崎彌五郎河瀨忠太夫彼等四人は半弓手挾み。敵もし遠見を付け置くか。又は落ち行く溢れ者助勢あらば射留めよと。由良之介が下知によつて。左右を見定め前後に氣をつけ。しんづ〳〵と歩み行く。芦野蒼谷千馬村松村橋傳次。大太刀佩いてぞ續きける。地鹽田赤根は長刀構へ。中にも磯川十郎は十文字の鞘外し。遠松甚六片鎌かたげ。杉野木村三村二郎。皆一樣の花田の脚袴由良之介が智略にて八尺計の大竹に。弦を掛けてぞ持ちたりける。勇む心は春めきて雪に秀づる雪の梅。白梅猜む白出立白小袖に黑羽織。金の札に面々の假名實名書付けて。袖標に付けたれば有明月に光り合ひ白石。黑石。打散す

亂れ。碁盤に　地金銀の。砂子を撒きしに　三重異らず　フシ扨其の次に　地堀井彌惣七十二歳一子彌九郎廿歳。親子名に負ふ覺の者ゆらり〳〵と出でければ。矢間の庄司六十八歳嫡子矢間重太郎。廿六歳音に聞えし親子の武士。今日を限りの死軍と莞爾と笑うて出てたるは。獅子と虎とが子を連れて　フシ孤山を巡る如くなり。地扨其の外吉田奥山小寺が嫡子。由良が從弟の大星瀬平。岡野中村矢島衞門平賀左衞門牧野平次。由良之介は後陣の押へ忠臣以上四十五騎。義を泰山より重んじ命を鴻毛と輕んじ。心を金石に比へしは。如何なる天魔破旬なりとも堪りつべうは無かりけり。由良之介下知して曰く。夜討の大事は奇正の變敵を明に誘引出し。味方は暗みを小楯に取れ女童に手を負せそ。地天下を恐るゝ敵討矢を放つとも塀越さすな。火の用心に心をつけて繋ぎ馬を放すな。折々に合圖の笛吹合せ吹合せ。敵に中を割らるゝな敵をさへ討つならば。名乘つて勢を引きゃとへ合詞を常にして。味方討たすな同士討すな。合詞も三度に替へ乘込む時は山か鐘。軍になつては花か海。退口は笠か鵜。向ふ者は討つて捨て逃ぐる敵を追驅けて。無益の功名手間どるな取るべき首は只一つ。サア攻寄せよと手組を揃へしと〳〵〳〵。しと〳〵〳〵と詰寄せて。門の南北二手に分り屋形を脱んでひた〳〵と。塀裏についたりし心の中こそ　三重嬉しけれ。地時刻はよきぞすは乘れと千崎彌五郎。須田五郎が肩を踏へて飛上り。塀の腕木に手を掛けて。乘入らんとせし所に。夜廻中間拍子木打つて來りける。人々あつと靜まれどもイヤ乘りかゝつたる一番乘。やはか乘らで置くべきと。えいやつと打跨ぎ。フシ難なくひらりと乘込みける。地中間驚きやれ盗人よといふ所を。彌五郎取つて押へ討つて捨つべき奴なれども。案内のため暫くと帶を解いて括し上げ。控柱に縛りつけ我拍子木を打つ間に。門の扉を打放せと家の内外諜合せ。拍子木ははしく打ちければ外より小寺河瀬忠太夫。掛矢振上げどう〳〵と。打つ音に相番の中間。何事ならんと出る所を彌五郎飛びかゝつて切つて捨て。又拍子打ちければ外より掛矢どう〳〵〳〵。咎むる中間ずつばと切り拍子木の音かち〳〵〳〵。掛矢の音どう〳〵どう。中間出づればずつばと切り三人切つて捨つる間に。力に任せて打つ掛矢門

の金物打外し。門中よりほつきと折れ。扉微塵に打碎かれ　フシ大門くわつとぞ開けゝる。地大將由良之介忍の火差上げ。内を見廻し山と聲をかけければ。鐘と答へて一同に我も我もと込み入りしが。詰り詰りの戸を締めて内より錠は固めたり。敲き割れば目を醒し内より先を取らるべし。左右なう入るべき樣もなき所に。豫て期したる謀大竹の弓五張。戸口々々の敷居鴨居に確かと食ませ。各一度に手を揃へ刀を拔いて弓の弦。ふつつ〳〵と切りければ大竹に彈れて。鴨居を四五寸持上げ。遣戸妻戸ははら〳〵と將棊倒しとなりにける。詞力彌すかさず緣の上へ駈け上り。鹽冶判官高貞が家臣大星由良之介義國。同じく力彌義道。此の外忠義の武士四十五騎。亡君の仇を報ぜんため攻寄せ候。武藏守殿の御首を賜つて。亡君判官が黃泉の闇を照らすべき。地存念なりと呼ばはつて一文字に切つて入れば。すはや夜討と混亂して宵の茶の湯の茶筅髪。寢惚顏に素肌武者　フシ太刀よ鎌よと犇いたり。地小勢なれども寄手は今夜必死の勇者。合詞合圖の笛吹き合せ。此處に集り彼處に亂れ馬手に開き弓手に落み。祕術を盡せば由良之介餘の者に目なかけそ。たゞ師直を討ちとれと八方に下知をなし揉立て〳〵　三重へ攻めにけり。地北隣は仁木播摩守。南隣は石堂右馬之助兩屋敷より何事かと。屋の棟に武者を上げ提灯星の如くなり。ワキ詞へ軍兵屋根より聲を掛け。御屋敷騷動の聲太刀音矢叫こと騷しく候故。狼藉者か盜賊か但し非常の沙汰候か。承り屆けよと主人申付けらるゝと高らかに呼ばはりける。シテへ寄手は元より返答せず師直方には狼狽へて。聞入るる者もなく隙間あらばと逃足も。門々には寄手の兵槍の穗先を突つかけて。出てば突かんと待ちかけたり　ワキ詞屋根の上より口々に。よし何にもせよ隣屋敷の騷動を。聞捨てにせんやうもなし。御加勢申し一防仕らんと呼ばはりける。　シテへ大鷲文五原鄕右衞門詞をそろへ。これは鹽冶判官高貞が家來の者ども。主君の仇を報ぜんための働き候。天下へ對する狼藉にても候はず。元より兩隣仁木石堂殿へ。何の遺恨候はねば卒爾致さん樣もなし。火の用心は形の如く申し付けて候へば是以つて御用心に及ばぬ事だ穩便に捨て置かれ候へ。それとも是非御加勢と候へば。力なく一矢仕らんと高聲に呼ばはつたり。ワキへ兩家の人々

これを聞き。御神妙御神妙弓矢取る身は相互。我人主人もつたる身は尤も斯くこそあるべけれ。地御用あらば承らんとフシ靜まりかへつて控へけり。地一時計の戰に寄手僅か二三人。薄手負うたるばかりにて敵の手負は數知らず。討たるゝ者百餘人殘る者は逃げかくれ。今は手に立つ者もなしされども大將師直。影も形も見えざれば由良之介大きに急いて。詞年月心を碎きしは彼奴一人を討たん爲。寢間と覺しき所を見よと。地襖障子を蹴破り〳〵奥へ入つて見てあれば。夜着蒲團引きさばき枕ばかりぞ殘りける　詞ヤア是を見よ。斯る寒夜に此の蒲團曖まり冷めざるは。只今脱けしに極つたり近くにあるぞそれ搜せと。地天井屋根裏緣の下槍を突込み矢を射入れ。打返して尋ぬれども師直はなかりけり。詞外にも人を配り置く門へ出でん樣もなし。各呆れて立つたりしが。由良之介あたりを見廻し横手を打つて。あの水門の箱樋こそ一人這うては通るべし。內より水を流しかけ外へまはつて窺ひ見よ。內に人の有無は水の幅に知るべきぞ。地心得たりと堀井の彌惣遠松甚六。外へまはつて待ちかけしに內より水をどう〳〵と。汲入れ汲入れ流せども水口割れて滴の。跡へ餘つて落口はフシ岩に堰かるゝ如くなり。詞サア人あるに極つたり。槍を入れて搜せやと。手々に槍を突込み〳〵狩立つれば。堪り兼ねて泣き叫びなう御助け下されと。詞這出づるは藥師寺なり人々はつと惘し所へ。大星力彌走り寄りなんのごくにも立たぬ奴。地人手間取らせし憎さもにくしと。ふりあげて首打落せば。紅なるのフシ血汐の樋とぞ流れける。地由良之介大音上げ是程迄しほせて。師直を討漏すよつく天道に捨てられたる我々。不運の程こそ口惜しけれ。詞悄々歸つて死なんより此の處にて腹掻切り。四十五人の怨念惡靈となつて師直を取殺さんと。思ふは如何にといひければ力彌をはじめ原矢間。堀井片山四十餘人いづれも左樣に存ずれども。大將の詞を相待つたり我々先を仕らんと。面々肌を押寬げすでにかうよと見えし所に。地豫て信ずる正八幡愛宕山の御加護にや。既の傍なる小屋の內より煙頻に渦卷上る。詞由良之介きつと見て南無三寶。あの煙其のまゝ打棄て外の人に鎭められ。鹽冶郎黨四十餘人師直を討損じ。狼狽たりといはれては恥辱の上の名折なり。地いざしづめん尤

と我も我もと小屋の戸に手をかけ。えいやつと引放せば中には薪炭俵ッシ煙は消えてなかりけり。地此の内は物臭し探せや搜せといふ聲に。内より炭を摑みかけ割木を投げかけ投げつくる。矢間の庄司は炭俵弓手につかんで投げのけ。無二無三に切つてゐる師直今は敵はじと。躍り出づるを重太郎あますまじと飛掛り。押並べてむづと組み一締しめて跳ね倒し。詞取つて押へ高の武藏守師直を。矢間重太郎組留めたりと呼ばはれば。地由良之介をはじめとし四十五人が聲々に。浮木に逢へる盲龜はこれ三千年の優曇華の。花を見たりや嬉しやと首打落し聲を上げ。踊上り飛上り扇を開き舞ふもあり悅の鬨の聲首眞中に取廻し妻を捨て子に別れ。老いたる親を失ひしも此の首一つ見んための。今日は如何なる吉日と首を叩いて喰ひついつ。一度にわつと嬉し泣きッシ理すぎて哀なり　地由良之介は師直が白無垢斷つて首押包み。詞矢間殿御親子は姿をかへて片時も早く。我が君の御菩提所光明寺の御墓まで此の首を持參あれ。地我々は後よりとあらぬ下郎の首とりあげ。同じく師直が白無垢切つておし包み。鎗に結ひつけ堀井の彌五郎。大鷲文五に指荷はせ師直が本首を。御墓所に供ゆれば今生の本望これ迄なり。せくまい〳〵せく事ない此の屋敷も今迄は師直が屋敷なり討たれし跡は天下の地。踏荒すは恐れぞや第一は火の用心。螢ほどの火もしめせと。つまりづまりを靜々と。心靜かに巡見し敵の一類一家の武者。追手かくるは目前なりいらぬ我等が一命。彼等に施し報謝せよと門外に下り敷いて。待合せ見る武勇の程天下にふるゝしのゝめや。是は功名寺は光明。寺へと　三重へいそぎける。フシ夜も明け行けば。谷七郷に隱れなく在鎌倉の大小名。何事やらんと兜は着れど鎧は着ず。片手矢矧げて走るもあり馬の腹帶を締め兼ねて。肌脊に乘つて駈くるもあり辻々の番太鼓。人馬東西に馳違へ上下の騷動斜ならず。地師直が嫡子師泰が郎黨。光明寺の門前に雲霞の如く取りかけ。門を開きて御首渡せ。異議に及ばは寺の門を叩き破り。堂も伽藍も打碎き片端に坊主首。捻ぢ切つて奪ひ取れ渡せ〳〵。と犇きける。地寺僧の面々表の袖に玉襷。棒よ杖よと防げどもッシ制し兼て見えければ　地住職の老僧立ち出で。詞やあ〳〵斯くいふは師泰殿の手勢とや。して侍か下郎

かよも侍にては有るまじ。鹽冶殿の家臣四十餘人の人々は。師直を討取り首を鹽冶の墓に手向け。本望達せし上は。鎌倉殿の御咎恐れありとて各身を捨て只今幕府の御所へ罷出で。如何樣とも御制法に仰付けられ候べしと。御下知を相待ち申さるゝ。是をこそ弓取の手本はいふべけれ。和殿原は主君の親を闇々と討たせ。其の場へ下り合ひ討手の一人も切留めず。地喧嘩過ぎての棒ちぎり木佛場といひ長袖に向つて。嚴がましき振舞當寺の法師は怖からず。幕府の御所より御指圖のなき間は。あの生首が髑髏になるまでもいつかな事。此の老僧が手足をもいで取らば取れ。渡す事は叶はぬとフシ發言はなつて宜へば。地いや論は無益たゞ込入つて奪ひとれ。門押破れとわめきけるかゝる所に畠山。左京太夫上使なりと呼ばはれば。さしもの軍兵憚りて門の左右に平伏す。詞内より門を明けければ。畠山老僧に對面あり。鹽冶判官が家來ども主人の仇を報はんため。夜前高の師直が館へ押寄せ。師直を討取る條武門の面目弓馬の譽といひながら。御近所近邊とも憚らず鎌倉を騷す。御咎によつてすなはち仁木石堂に御預け。今日鹽冶が墓の前にて。殘らず切腹さすべしとの御諚なり　地はた又師直が首は一子師泰願に任せ。送り遣すべしとの仰なりと述べらるれば。住持御諚を承り。首桶しつらひよろしくまかなひ取納め。詞師泰殿の身うちにて。人がましき方御請取り給へとありければ。地執權三隅の郡司と嚴しげには名乘れども。かひなき主の首持つて。すご〳〵として歸りしはフシ面目なうこそ見えにけれ。地直に用意あるべとして判官の廟を中にあて。左右に疊敷き並べ前に白砂積みたるは。溢れし血を清めん爲の用意なり。後に白幕引廻し白絹の布團を敷き。四十餘口の腹切刀三方に並べたり。鎌倉中の諸侍天晴武士の守り神。弓矢取る身のあやかり者と威儀を正して參詣す。歌人は悼の和歌を陳ね文者は歎の韻を搜り。上下萬民老若男女名殘をし合ひ我先にと光明寺に群集して門前。市をぞ　三重へなしにける　フシ既に時刻も。午の刻。地羊の歩近付きて檢使の大將名越備前の守。光明寺に着き給へば介錯の役人を始めとして。帳付横目共の外の。役目役目の場を請取り　フシ爰を晴と列座あり。地用意よくば面々出でられよとありければ。左の幕より大星由良之介を先

に立て。矢間堀井原郷右衞門廿三人續いたり。右の幕より大星力彌第一にて。小寺片山東森廿二人打連れて。歩み出でたる有樣は古今稀なる武士の業。譽を取つて世の中の濁に染まぬ白小袖。娑婆は夢なる契にて淺黄上下淺くとも。君に三世の忠孝と各墓に回向して。諸役人に一禮述べ一面に著座して。目と目をきつと見合せ檢使の詞を待つたるは。天晴名士の腹切る樣尤かくこそあるべけれと。知るも知らぬも涙を浮べあつと〻感ずるばかりなり。名越備前守進み出て。地上よりの御詞には此の度鹽冶判官が家臣四十餘騎。高師直を討つて亡君の仇を報ずる事。前代未聞の忠臣一人當千の働甚だ感じ思召し。一命助け置かれ度く思召すといへども。太平の時代に干戈を動かし御旗下を騷がすあやまり。國制據所なく切腹仰付けらるる。强將の下には弱卒なし。かた〳〵が忠義に依つて鹽冶判官。存生の仁德を思召しやられ。判官が一子竹王丸父が遺跡相違なく。出雲伯耆兩場宛行はるゝとの御詞。冥途へ參つた判官に申し傳へ有難く存じ奉り。早々切腹仕れと高らかに述べ給へば。はあつと一度に頭を下げ悅涙悅笑。肩衣取つて押退け押退け由良之介刀を頂戴して左の小脇に突立つれば力彌も續いて突立て突込み引き廻し〳〵。時も違はず場も違はず主君の墓の左右にて。一度に腹を切つたりしフシ三世の緣こそ賴もしけれ。地ツメやがて殘らず介錯して直に御寺を墓所。萬劫末代萬々年朽ちせぬ石に名を殘し。主君の子孫繁昌富貴自在の幸ひも。忠と孝との誠の心。天地に叶ひ佛神もめでたく。守り給ひけり。

（奥書缺）

兼好法師あとおひ　碁盤太平記終